

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第五巻「文化財編」は、第一章「美の香り」第二章「匠の文化」第三章「住の演出」第四章「地に根ざす」の四章からなり、各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込）で販売しています。第六巻「民俗編」の予約も受付中です。

第四章では「地に根ざす」と題して、日野町に馴染み深い身近な文化財を紹介しています。

第一節の天然記念物では、鎌掛の屏風岩、ホンシヤクナゲ群落などの六件の天然記念物を、植生調査票などの学術的データを織り交ぜて解説しています。

第二節の考古では、町内に約一五〇か所ある遺跡の中から、県史跡に指定されている作合窯跡をはじめ、代表的な遺跡を取り上げています。遺跡から出土した遺物などから、当時の集落規模や住人の様相がうかがえます。

第三節の祭礼行事では、無形民俗文化財に指定（選択）されている中山の芋競べ祭・日野曳山祭・日野のホイノボリの三件を紹介しています。祭りの歴史的背景や伝統的な形式から、地域に根付き継承されている祭りの姿を浮き彫りにしています。

第四節の街道と道標では、古く

から交通の要であった日野と近隣地とを繋ぐ道（街道）、それらの道脇に建つ石製の道しるべ（道標）について解説しています。江戸時代

に街道沿いの宿場町として賑わい、人びとの往来が盛んであった往時の日野の姿を想起させます。

第五節の地域文化財では、「青い目の人形」や細川雄太郎氏の童謡など、地域のシンボルとして大切に守り継がれているものを取り上げています。一般的に文化財として認識されにくいものが、いかに地域性を物語る大切な文化財かを知ることができます。

これらの中から第四節の街道と道標について詳しく紹介します。

御代参街道

古くから交通の要所であった日野には、多くの道が発達していました。その中でも、御代参街道は江戸時代の主要街道であった東海

道と中山道をつなぐ役割を果たす大きな街道であったとされています。江戸時代の史料には「北国街道安土越」「伊勢道」などと記されており、「御代参街道」と呼ばれるようになったのは、明治時代以降とされています。この街道は、伊勢神宮と多賀大社を結ぶ参詣道であったと同時に、街道沿いに日野商人をはじめとする近江商人を輩出した拠点が存在していることから、「商いの道」でもあったとも考えられています。

御代参街道の道しるべ

御代参街道の道沿いには、多くの石製の柱を見ることができます。このような道の分岐点や曲がり角にある石製の柱は「道標」や「道しるべ」と言われます。そこには行き先や左右・東西南北などの方向が記されています。

内池郵便局前の交差点には、江

戸時代中頃に建てられたとされる方柱型の道標があります。この道標には、「左いせみち」「右たが北国道」と刻まれています。また、文化九年（一八一二年）に建立された大字上野田にある大きな石造の常夜灯には、伊勢神宮への行き先が案内されています。常夜灯型道標は滋賀県下に三基しか現存せず、その中でもこの常夜灯は、規模が大きく資料的価値が高い道標です。

滋賀県には約四五〇基の道標があり、日野にはその一割以上を占める多くの道標が所在しています。また、県下の道標の中では、「日野」が「京」「伊勢」に次いで三番目に多い行き先地名となっていることなどから、日野が湖東地方の商業拠点として重要な位置にあってことが分かります。



▲御代参街道の常夜灯